



2011 年 7 月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 33

緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 25 (聞き手 高橋素子)

高橋 > 今年は全国的に、例年よりかなり早い梅雨入りとなりました。その上、この時期にしては思いがけない台風二号の影響で、大地震、大津波で傷む東北の太平洋側が、大雨と大風に又もや見舞われてしまいました。被災地には勿論、日本全土に、暴れず騒がず恵みの雨であってほしいと、願わずにはいられません。雨に濡れる紫陽花の風情も、また一段と格別なものですが、今年は梅雨入りが早すぎるためにまだほんの薄化粧、花色の七変化の楽しみは、まだこれからというところでしょうか。

会長 > そう、これからが楽しみです。紫陽花は、梅雨が大好きな花ですから。紫陽花のことを七変化と言うのは俳人だけかも知れません。七変化を楽しんだからこそこの呼び名です。

経過的季語にやあらむ七変化

が拙句にあります。紫の紫陽花になる前の七変化の時期が、控えめで微妙で本当に美しい。蝶が幼虫から蛹になって羽化するまでを変態と呼びますが、七変化は植物の変態に近いですね。色が成熟するまでの試行錯誤を見せてくれます。

高橋 > それでは、本日は前号に続いて「秋の天文」の部からという事になります。季語は、「月」と「後の月」です。会長は、中国ウイグル自治区を旅されて、パオにお泊りになった時に詠まれていますね。

鉄の鍋月にかたむけ磨きけり 健

旅のお話も伺いたいところですが本題に参ります。

能因が首だす穴や今日の月 紋村

欠びして月誉めて居る隣かな 几董

月見とて行けば銭とる小橋哉 士朗

明月の御覧の通り屑家かな 一茶

明月を取ってくれろと泣子哉 一茶

有合の山ですますやけふの月 一茶

月に柄をさしたらば誰か何かかむ 大江丸

枝豆は喰ひけり月は見ざりけり 子規

後の月何か肴に湯気のもの 召波

それにしても流石に「月」ですね。名句、駄句(?)取り揃えてずらりと並んだようですよ。「今日の月」とは名月のこと、「後の月」とは陰暦八月十五夜の月に対して、九月十三夜の月を言いますね。ご解説よろしくお願い致します。

会長 > 「能因が…」、

能因は沢山、恋の歌を詠んでいて、月をからませた作品が多いですから、月が出れば能因が首を出すだろう。そうしたら一首詠むに違いない。そんなにも素晴らしい月だというわけですね。

「欠びして…」、

あくびと読むのでしょうか。月を見てくたびれて、あくびが出たということですね。それほど、じっくり鑑賞したのです。昔はテレビもなかったから、そういうことが出来た。

「月見とて…」、

月見するのにいい場所に行く。橋を渡るのに銭が必要だった。

「明月の御覧…」、

これは有名な句ですね。月を擬人化している。月には平伏している。すべてを見られている。それほどに明るい月。

「明月を取って…」、

これはつくり話ですね。そういう句ができるほど明月なんです。

「有合の山…」、

月見は山との取り合わせで一段と景色が映えるわけですが、適当な山がなくて、有り合わせの月ですよと、自嘲している。それでも、名月は名月。

「月に柄を…」、

団扇になります。団扇に絵や文字を手書きしたものです。なに書きましょうか。

団扇の本体が月ですから…、困りましたね。

「枝豆は…」、

花より団子。月より枝豆。

「後の月…」、

冷えてきたのですね。温かい料理を所望という贅沢なこと。

高橋 > 沢山の句のご解説有難うございました。月に柄をさしたら団扇ですか。成る程そうですね。私、食いしん坊ですから、大きな串団子かと思いました(笑)。

これで「秋の天文」の部は終了ですので、次の「秋の時令」に参ります。時令は年中行事のことですね。

季語は「立秋」です。

秋来ぬと合點させたる噺かな 蕪村

秋来ぬと目にさや豆のふとりかな 大江丸

これは、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」という古今和歌集の藤原敏行朝臣の歌の『本歌取り』ですね。

そう言えば、会長御自身にも本歌取りの面白い句がおありですね。「第七句集のタイトル」にもなった句で、

怠けぐせ治らず春の海のたり 健

「御自身の性格を御謙遜なさって、怠けぐせだなんて！」と申し上げましたら、「私の性格？とんでもない！私は結構、勤勉なんですよ」と、お笑いになりながら窘められましたね(インタビュー 八木健の句を解剖する)。勿論、この句の本歌は、

春の海終日のたりのたりかな 蕪村

ですね。また、脱線しました。本題に戻ります。

あきたつと思ふところが秋かいの 大江丸

会長 > 「あきたつと・・・秋かいの」、
「秋かいの」は、口語俳句ですね。
あきたつと思ふは、こころの秋だとも、という意味です。

高橋 > 次の季語は「今朝の秋」「初秋」「末枯」「肌寒」「うそ寒」で、一句ずつ挙げられていますよ。

貧乏に追つかれけりけさの秋 蕪村

初秋や団扇の風をひいた人 太祇

末枯や橋守が顔長くなる 巢兆

葬や借着を着けて肌寒き 荒井蛙

噓して鼻うそ寒くむづ痒き 紅緑

会長 > 「貧乏に・・・」、
これは、「稼ぐに追いつく貧乏なし」の諺を使った句です。貧乏に追いつかれてしまったという自嘲ですが、蕪村は家庭的には恵まれず家計も苦しかったようですね。
「初秋や・・・」、

扇ぐにも限度がありますね。風邪ひくほど扇いでしまったという、分かり安い滑稽です。

「末枯や…」、

橋守は橋の番人つまり有料の橋の料金係と思われます。末枯と取り合わせですが、末枯れの頃には閑が出来て「あくび」ばかりしてるわけです。だから顔が長くなるんです。

「葬や…」、

葬式に行くのに友人の着物を借りて着るサイズが合わず、ぶかぶか。すると隙間風で寒いわけですね。

「嚏して…」、

鼻うそ寒くむづ痒い。嚏のあとの感じがよく出ています。

高橋 > いつもながら、面白いご解説有難うございます。

次の季語は「夜寒」ですが、俳人に好まれる季語らしく沢山の句が詠まれていますよ。

盗人の屋根に消行夜寒かな 蕪村

起て居てもう寝たといふ夜寒哉 蕪村

三厘の風呂で風ひく夜寒かな 子規

鼠狩れば鼠の笑ふ夜寒かな 子規

据風呂に二人入込む夜寒かな 碧梧桐

板塀に小便する夜寒かな 梧月

朝寒ぢや夜寒ぢや秋はくるるのぢや 紅緑

会長 > 「盗人の…」、

千両箱を担いだ鼠小僧次郎吉が屋根づたいに、つつと走り闇に消えた。空には寒そうな月ひとつ。これを夜寒というんですね。

「起て居て…」、

誰かに何か誘われたのでしょうか。携帯電話の無い時代ですから、板戸一枚トントン叩いて、蕪村の所に俳諧仲間が付け合いの句の相談に来た。昼間、存分に遊んでやったのに…というわけで、「明日にしてくんな。もう寝てるんだ。」てなことを言ったんでしょう。

「三厘の風呂で…」、

三厘の銭湯の代金ですが、料金としては安価なんで、その代わりに湯の温度が低いから風邪をひく。まあ、わかりやすい句です。

「鼠狩れば…」、

チュウチュウ言いながら屋根裏を走りまわるんですね。それを笑うとしたのは、鼠はたくさんいたから、いくら捕っても追いつかない。鼠算で生むから人間なんてへっちゃらです。だから子規さんもかなり諦めて、鼠狩るより俳句でも詠もうかと…。

「据風呂に…」、

銭湯じゃなくて据風呂は家庭に設えた風呂ですね。据えたといっても桶ですから移動もできるわけ。昔は毎晩、風呂を焚いたりはしない。だから風呂をたてるとなると、喜んでわれ先にと入りたがる。冷えた体の二人では、湯の温度が急激にさがる。首ただけだして動けない状態です。

「板塀に…」、

立ち小便は、昔は当たり前の風景

でした。板塀にするから音がする。その音が闇に響いて寒さを演出するのです。ましてや温かな液体を放出して体温が下がるから夜寒になる。

「朝寒ぢや…」、

朝寒、夜寒、いずれも秋の季語

です。朝寒、夜寒を重ねて、いつしか暮の秋になるということです。

高橋 > 面白いご解説に大笑いしている内に、お時間になってしまいました。次号は秋の時令、季語は「夜長」からと言う事に。

ところで、会長が前号でおっしゃいました様に、『この紅緑の句集がいつか私たちの血となり肉となる』ことを願います。最後に、本日の季語をお使いになって、浪曲調で滑稽句を一句をお願い出来たらと思います。

会長 > ♪ 名いい月のおおお 絵をもて能因おびいき出し
子規の女郎買う話いいい聞く夜長ああ ♪
平成の世は末枯れの時代なりいいいと呟きつつう
鼻毛抜きつつ滑稽句ううううう詠むう ♪
